令和５年度入学者選抜試験問題表紙

小論文　（前期日程）（生命環境学部社会系）

（　注　意　事　項　）

1．試験開始までに表紙の注意事項をよく読んでください。
2．試験開始の合図があるまで、この冊子を開いてはいけません。
3．試験開始の合図があったら、すぐに用紙の種類と枚数を確かめ、受験番号をすべてに記入してください。
　● 表　　紙　　1枚
　● 問題並びに答案用紙（その１～その５）　各１枚　計５枚
4．配布された用紙の種類や枚数が異なる場合や印刷が不鮮明な場合は、手を挙げて監督者に知らせてください。
5．試験終了後、すべての用紙を回収します。
6．問題用紙の余白や裏面を草案に使用しても構いませんが、採点の対象にはなりません。

受験番号

令和５年度入学者選抜試験問題並びに答案用紙（小論文 社会系　その１）　― 前期 ―

問題　地域資源と開発に関する問題１・２・３に答えよ。

問題１　以下の文章１を読み、あとの問(1)・(2)に答えよ。

【文章１】

ドイツの映画監督レーニ・リーフェンシュタールは、もともとベルリンのモダンダンサーだった。溢れんばかりのバイタリティと、類まれな運動神経に恵まれた彼女は、怪我でダンサーを挫折してもへこたれなかった。今度は山の世界に魅惑され、ロッククライミングをするようになる。リーフェンシュタールの美貌としなやかな肉体は映画に向いていると思った山岳映画の巨匠アーノルト・ファンクは、彼女を主役にして映画をいくつか撮った。リーフェンシュタールは次第に俳優であることに飽きたらなくなり（中略）、自分で映画を撮るようになる。

その代表作が、「青の光 Das blaue Licht」、アードルフ・ヒトラーが政権を獲る一年前、1932年に封切りされた農村の映画である。脚本はバラージュ・ベーラ、ハンガリー出身の前衛芸術家で、ゴージャスな組み合わせだ。リーフェンシュタールが演じる主人公のユンタはボロ布を身にまとった純粋無垢な女性で、村人からは魔女のように疎まれ、村のはずれの小さな小屋で暮らしていた。彼女に心許すのは、羊飼いの少年だけだ。舞台は、アルプス山脈の山間の村である。

実はこの村の近くに、満月の夜になると頂上付近から神々しい青い光を発する山があった。村人たちは満月になると、この山に吸い寄せられるように向かい、崖を登って、光の源を探ろうとするのであった。だが、崖を登攀（とうはん）する最中に滑落して亡くなる若者が多数いた。村人たちは、このような悲惨な事件が続くことがユンタと関係があるのではと疑っていたのであった。

ユンタは崖登りが得意で、青い光を頂上から放射する山にもたびたび裸足で登っていた（中略）。この山はユンタにとって聖地であった。頂上付近の洞穴が青い水晶によって埋め尽くされていて、それが満月の光に輝いて、青々とした光が村にも届くことも知っていた。

ある日、町に住む画家がユンタと出会い、小屋を訪れる。画家はドイツ語しか話せず、ユンタはイタリア語しか話せないけれど、お互いに、そして、羊飼いの少年とも心が通い合い、人とあまり接しないユンタも彼に心を許すようになっていた。

ところが、満月の夜、青い光を放つ洞窟に行くため山に向かおうとするユンタを画家は尾行し、ついに画家は洞窟で青い水晶にうっとりとしているユンタを発見する。画家はこの水晶があれば、貧しいユンタも村びとも幸せになると考え、村に降りて、この水晶のありかを教える。村人たちは道具を集めて行列を作り、山に向かう。そして、ごっそり水晶を持ち帰ってしまった。絶望したユンタが崖から身を投げて、話は終わる。（中略）

私は、「青の光」という映画には、農村が芸術作品の対象となるとき、人の心を動かす重要なポイントが凝縮しているように思う。

第一に、開発と神秘の関係である。世界中のどの村にも聖地は存在したし、いまなお存在するところが多いだろう。そして、世界中のほとんどの村で、聖地は開発の対象になったり、産業廃棄物の放置の場所になったり、観光スポットとして整備されたり、ウランや銅や硝石の鉱山の発掘現場となって、聖性を剥奪されてきたことは、ちょっと歴史の本を開くだけでわかる単純明快な事実である。ユンタにとってそれは青い光を放つ山であったが、よその町の画家によって発見され、村人たちに発見され、資源として収奪される。世界の農村はつねにこの神秘を犠牲にした開発によって経済を発展させてきたのだが、重要なのは、ユンタのような聖性を帯びた「変わり者」も、精神医学が少しずつ浸透していくなかで消えていったことだろう。①開発とは、自然環境を改変し、橋をかけ、風景を変えていくだけではない。そこに住む人間の改変も要求するという当たり前のことをこの映画は思い起こさせてくれる。

第二に、芸術における素人の美である。いわゆるエキストラであるにもかかわらず、俳優の一人であるかのように、画面いっぱいに農民たちの顔を映す手法は、②ある特定の社会階層に閉じ込められていた芸術を庶民に解放していく、というセンスである。逆にいえば、毎日、野外で仕事をして太陽に焼けた顔や、土や水に手を突っ込んで作業をするうちに丸みを帯びた指は、白い化粧を塗って光が当たるようにした俳優の顔よりも美しいかもしれないという美の価値の転倒を目指すものともいえよう。

（出所：藤原辰史「農の美学　巨大で単調な美　青の光」英明企画編『農業と経済』2022 winter　英明企画、2022年　所収　一部略）

受験番号

令和５年度入学者選抜試験問題並びに答案用紙（小論文 社会系　その２）　― 前期 ―

問(1)　文章１の内容を踏まえ、地域における開発の意味を次の小問に従って述べよ。

１）文章１に登場するユンタにとって、開発とはどのようなものであったか。あなたの考えとその理由を５行以内で述べよ。句読点・数字・記号も１文字と数える（以下同じ）。

２）文章１に登場する村人にとって、開発とはどのようなものであったか。あなたの考えとその理由を５行以内で述べよ。

３）文章１に登場する画家のように、地域に新たに訪れた者にとって、開発とはどのようなものであったか。あなたの考えとその理由を５行以内で述べよ。

４）上記の３つの立場から見た開発の意味を踏まえ、開発をどのような条件下ですべきか。あるいはすべきではないか。文章１中の下線部①に留意して、あなたの考えとその理由を 10 行以内で述べよ。

受験番号	小計

問(2)　文章１中の下線部②は、欧州の階級社会における芸術の在り方を前提としたものである。この立場とは逆に、第２次大戦前の日本における芸術は、次の文章２・３のとおり、庶民の日常に溶け込んでいた。文章１中の下線部①のように、開発がそこに住む人間にも影響を及ぼさざるを得ないのであれば、日本における開発で考慮すべき点は何か。あなたの考えを10行以内で述べよ。

【文章２】

「(欧州の）われわれは、芸術というものをわれわれから疎外して考える。日本人は生活のすみずみにまで芸術を生かしている。」（ヨーゼフ・アロイス・シュンペーター）

注　シュンペーター：1883年２月８日生－1950年１月８日死亡　オーストリア・ハンガリー帝国モラヴィア（後のチェコ）生まれの経済学者。文章２は1931年来日当時の日本の印象をめぐる発言。

（出所：都留重人『近代経済学の群像』日本経済新聞社、1964年）

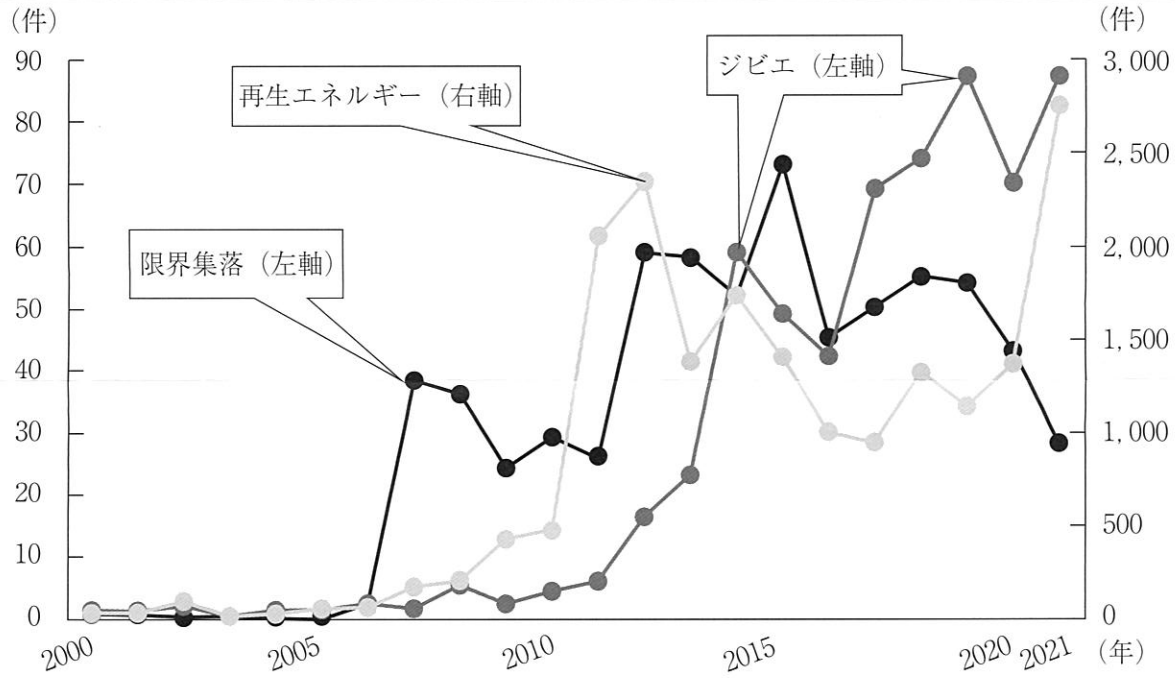
【文章３】

「明治期に長く日本に滞在した言語学のバジル・Ｈ・チェンバレンは、日本語にネイチャーとアートに値する言葉が無いことに気づく。まず彼は、日本にアートがないのかと言われればそうではなく、『日常生活に用いるどんなつまらないものにでも、できる限り、目を喜ばせ、心の糧となるようなものであるべきだ、というのが日本人の人生観である。』（チェンバレン著、高梨健吉訳『日本事物誌１』平凡社、1969年）とし、あまりにもアートが生活に融合していて、生活からアートだけを取り出す観念を持っていなかったからだとしている。ネイチャーも同様に、あまりにも生活に自然が同化し、同じように区別する観念がないと観察した。」

（出所：中室勝郎『なぜ、日本はジャパンと呼ばれたか　漆の美学と日本のかたち』六耀社、2009年）

受験番号	小計

問題２　図１は、農山村を巡る動きを象徴するキーワードの、新聞（全国紙）における登場頻度（記事数）の推移を見たものである。注１～４を参考にして、図１から読み取れることを箇条書きで示せ。



【図１】全国紙における３つのキーワードの登場頻度

注１　登場頻度とは、新聞記事検索サービス「ELNET」で全国紙と位置付けられている朝日、産経、東京、日本経済、毎日、読売の各紙について、「見出し」「キーワード」「本文」が該当するものの記事数である。

「限界集落」は、人口の50％以上が65歳以上の高齢者となり、冠婚葬祭を含む社会的共同生活や集落の維持が困難となりつつある集落を指す。過疎化と高齢化による農山村の存続危機を端的に表す言葉である。「ジビエ」は、食材として狩猟によって捕獲された野生鳥獣のことである。農山村の深刻な鳥獣被害への対応策として期待されている。「再生可能エネルギー」とは、太陽光や風力、地熱といった地球資源の一部など自然界に常に存在するエネルギーのことであり、農山村はその宝庫である。

注２　2007年には参議院選挙があり、地域間格差を巡る問題が争点となった。関連する出来事としては、2012年12月16日第46回衆議院選挙、2015年TPP（環太平洋パートナーシップ）協定の大筋合意がある。

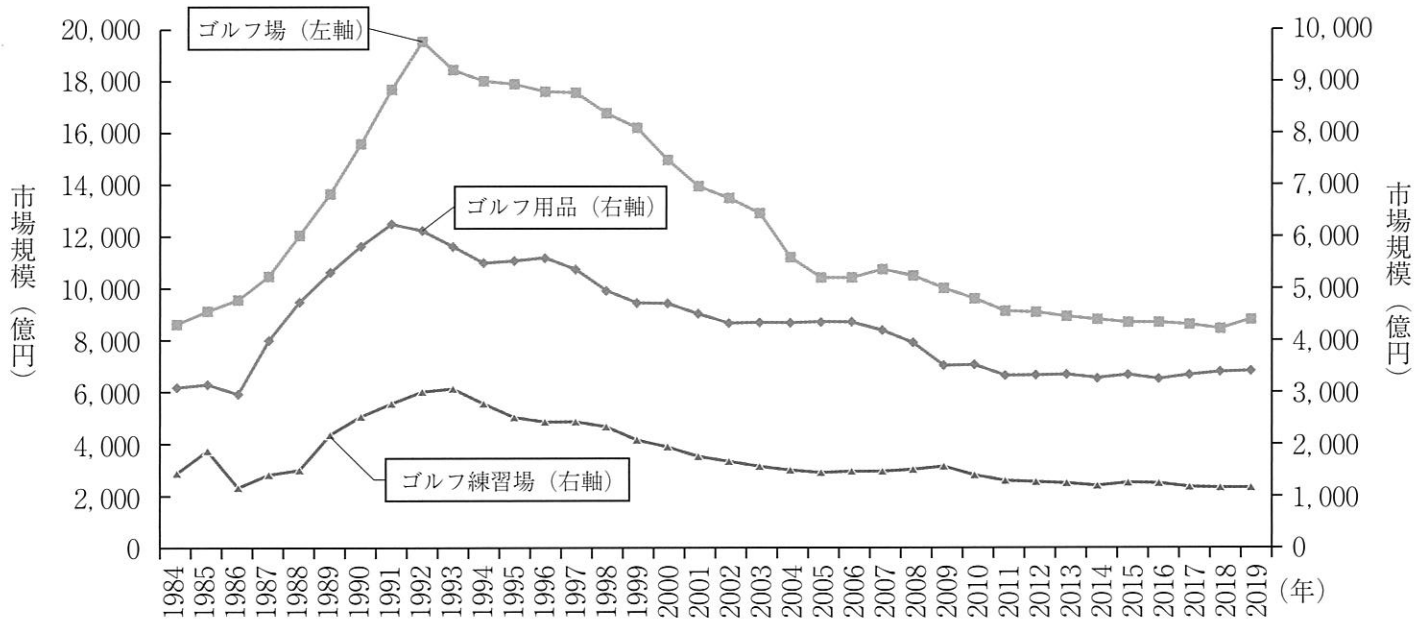
注３　2014年、厚生労働省が「野生鳥獣肉の衛生管理に関する指針（ガイドライン）」を定め、グルメサイト「ぐるなび」の「今年の一皿」にジビエ料理が選定され、「ジビエ元年」と呼ばれた。

注４　2020年10月に、日本政府が「2050年カーボンニュートラル」を宣言し、関連する施策が展開されている。

（出所：橋口卓也「キーワードで追う農村のトレンド」小田切徳美編著『新しい地域をつくる　持続的農村発展論』岩波書店、2022年　所収　一部改変）

受験番号	小計

問題３　第２次大戦後に書かれた文章１中の下線部②の主張は、文章２・３に描かれた、戦前の日本人の生活感覚が、戦後の経済成長と開発の過程で希薄化したことを表す。その理由はなにか。問題１・２の解答を踏まえ、その理由を、根拠を付して20行以内で述べよ。戦後の開発の一例として図２を掲げる。図２から読み取ったことも解答に用いること。問題１・２の解答の引用と、図２から読み取ったことには、下線を引くこと。



【図２】ゴルフに関連した市場規模（利用者の支出額）の推移

注：日本では、80年代後半から、地方圏の活性化の切り札としてリゾートブームが起こった。ゴルフに関連した市場もその一つである。図２では、地方圏から大いに期待された80年代半ば以降のその市場規模（利用者の支出額）の推移を掲げた。

（出所：山口有次「2019年の余暇関連産業・市場の動向」（日本生産性本部『レジャー白書2020』資料２、2020年）、https://www.jpc-net.jp/research/assets/pdf/Leisure20200824_2.pdf）

受験番号	小計